

誕生会のことなど

—東宮さまをお迎えして—

誕生会のことなど

わたしが広島に帰ってくる前の年ですから、昭和二十一年——戦争の終わった翌年のことです。そのころわたくしは、学習院小金井校の教授と、その寄宿舎の舎監を兼ねていました。小金井校というのは、東宮さまのいらっしゃる学年を一年級として、その上に二年級だけをおいて、その年の春発足した学習院中等科の一部でした。中央線武蔵小金井駅に下車して、東北へ向かって線路と直角の道を約二十分ゆくと、昔から桜で有名な小金井堤に出ます。この堤は、流れの急な玉川上水をその間にはさんで、今来た道とは直角に、したがって中央線の線路とは平行に長々とつづいています。その玉川上水にかかった小金井橋を渡り、竹藪にはさまれた道を、ものの五十メートルもゆくと、急に眼界がひらけ、右のかた、ひろびろとした畑の向こうに、二棟の細長い平屋の建物が見えます。それが学習院小金井校です。さらにそのさきの方に、榎と松の林をこえて、雄渾な傾斜線を描く宏大な建物が目に入ります。これが、かつて紀元二千六百年記念式典

のあげられた光華殿をこの地に移したものです。この光華殿のさらに向こうに寄宿舎があるので、これは光華殿と松林にさえぎられて、こちらからは見えません。東宮さまの御仮寓所は、さきに言った校舎と光華殿との間にある、平屋の質素な建物です。東宮さまは、毎日そこから学校へ通われ、また朝は起床後から登校時まで、午後は放課後から夕食時——時には就寝時まで、寄宿舎で級友と生活を共にされる習慣でした。

そのころ、寄宿舎では毎月一回ずつ、誕生会というのを催していました。その月に誕生日を持つ者のために、寮生と舎監が食堂兼集会所になっている室に集まり、みんなでその人たちを祝つてやるのです。その晩は会食のあとで室単位のさまざま余興が催され、若い寮生たちはすっかり興奮して、時のうつるのも知らない有り様でした。

昭和二十一年十二月の誕生会は、この月の十八日の夜催されました。数名の十二月生まれの者のなかにまじって、二十三日を御誕辰とされる東宮さまも、一寮生として、一同から慶祝をうけられたのは申すまでもありません。今わたくしには、頬を紅潮させた少年たちが、瞳をかがやかせながら、劇や独唱を熱演したあの夜の光景が、たまらなく懐しくまた尊く思い起こされるのです。「わたくしは、あの会の終わりに近く、胸にこみあげてくる感動を、つぎのような今様歌につづり、つたない朗詠をもって御耳をけがしたのであります。

万世よろづよかけて太平の

御代みよひらかんと宣のたまひし

国の歩あみのあけぼのに

御子みこ明星めいせいとなり給たまふ

千代ちよ万代よろづよに榮行さかゆかん

国の歩あみの象徴みしるしと

み園みぞに生おふる若竹わかしの

すくすくと君生きみうひ給たまふ

はかなき命いのちながらへて

今日けふにあふ身のうれしさを

何なににたとへんものもなし

何なににたとへんものもなし

ひととおりの、祝祭の余興が終わって、東宮さまは、一同に対する御答礼として謡曲を一曲うた

われた。「鶴亀」の冒頭の一節です。玉の御声とはこのような声をいうのであろうかと思われました。わたくしはあの夜の感激を永久に忘れることはないでしょう。

このたび、東宮さまを広島にお迎えして、満二年ぶりにお目にかかり、見ちがえるほど立派に成人なさった御姿を拝し、日本の光、世界の光としてのががやきを、いよいよ増して来られたことを知り、喜びの情にたえぬのであります。そして、はからずも、あの夜のことか思い出されましたので、ここに書いてみました。